

実践！バリアフリー講座(3)

「車いすにのってみよう！」

加藤裕美子氏

城戸宏則 氏

(国立大学法人筑波大学附属桐が丘特別支援学校支援部教諭)

車いす介助～感覚のズレを感じあう～

○加藤 桐が丘特別支援学校で教員をしております加藤と城戸です。筑波附属桐が丘特別支援学校は、板橋区にあります。体の不自由なお子さんが小学生から高校生まで通学している学校です。

車いすを介助するということになると、生活上、また学習上、コミュニケーションをとる上で感覚的に少しズレが生じることがあります。

介助する、されるというところで、そのズレ、感覚のズレをお互いが感じ取って、認め合い、話し合っ介助していくことが大切です。自分は何ができて、相手が何をしてほしいのかということをお互いが聞き合いながらやっていくということがとても大切です。今日、車いすの介助体験で、自分が車いすの操作をしながら介助してもらおう。また、逆の立場で介助してあげる。両方経験していただく中で、感覚のズレをわかっていただけたらと思います。

お怪我などをして、今まで実際に車いすに乗ったことがある方いらっしゃいますか。では、車いすを介助したことがある方。たくさんいらっしゃいますね。実際に今日は体験しながら、お互いにコミュニケーションをとりながら、うまくやっていけたらいい

かなと思います。その感覚のズレなのですが、今日の講座を通してそのズレの存在を知り、その次につなげていくことも大事です。そのズレを知るための、知識を得るための時間にしていただけたらと思います。

一般的に肢体不自由というと、体が思うように動かない、自分の体が意図的に動かないということです。しかし、体が意図的に動かないといっても、原因はいろいろあります。例えば、脳性まひのお子さんがいるとします。脳性まひのお子さんもいろいろな状態がありますが、目の前においしいお寿司があり、持って食べたいなと思うとします。上肢に緊張が入ってしまうと、緊張が強ければ、ひじが思うように伸びないということもあり得ます。伸びて手が届くけれども、おいしいお寿司を持つ力が調整できず、ギュッと握りしめてしまう、そういうこともあります。思うように動かせないということは、本当にさまざまな形で出てきます。

一口に肢体不自由といいましても、こういう支援をすれば、こういう介助をすればいいよというものはなかなかないですね。その肢体不自由、その方がどういう状態であるのか。しょうがい特性はそれぞれに違いますので、どうすればいいのかというところは、やはりお互いに聞いて一緒にやっていくしかないのかなというところが実情です。

先ほど見ていただいた本校の伸びやかに自己表現できそうな生徒たちですけれども、教員とか、よくお世話になっているヘルパーさんには「ああして、こうして」という依頼はとても上手です。でも、初めての方にはこう言ってしまいます。「大丈夫です」。はた

から見ていると、ちっとも大丈夫ではないです。「ありがとう」ってやってもらったらどんなにうまく進んでいくだろうと思うようなことでも、「大丈夫です」って言ってしまいます。

体が不自由な方々の SOS をどうキャッチするかってすごく難しいかなと思います。私は個人的にはホスピタリティーを持つことが大事だと思います。人に対する主体的な思いやり。ホスピタリティーを発揮するためには、まず目配り、気配り、心配り。それから、ちょっとした勇気などもそうですね。一般社会に出ると、勇気も必要になってくると思います。

肢体不自由のお子さんも、一人でできることはいっぱいあります。自分のペースで、自分のやり方だとできるけれど、集団の中に入ると、同じ流れでみんなと一緒にというのがとても難しいです。だから見ていて、そういうところでちょっと困っているお子さんがいたら、積極的に声をかけていただけたらと思います。

車いすについて

今日、実際に体験していただく車いすですけれども、いろいろなタイプがあります。こちらを見ていただくと、似たような車いすが2つ並んでいますけれども、どういう用途のものかおわかりになりますか。こちらは、同じような形ですね。自走もできて、介助もしやすいですね。こちらは見てのとおり、もう自分では操作ができない。全部、介助をしてもらうタイプです。最近の車いすはとても機能性もありますし、デザイン性も、いろいろなものが出ていて、手動用の車いすもとてもカラフルです。その方の



車いすを使って説明

ニーズによって背もたれとかクッションとか、さまざまな形状のものがあります。こういうタイプのものは、これからパラリンピックに向けてたくさん目にする機会が増えてくるのではないのでしょうか。

最近、電動車いすが非常に多いです。もうひと昔前ですと、電動車いすというのは少ししょうがい重い方、手動で大変な方がドクターから勧められて使っていました。今は、用途によってどんどんこういうものを利用していこうという時代が変わってきています。「ああ、今日はちょっとお出かけで遠くに出るから電動にしようかな、普段は手動だけど」とか、「今日はお出かけ先に坂道があって、つらそうだからこれにしようかな。」「今日は寝不足で体調が思わしくないから電動にしようかな。」等、その時によって電動を使い分ける。電動も種類があり、これは簡易電動車いすです。電動、手動と切り替えができるタイプです。でも、これでも重量は30、40キロあります。向こうのがっしりとした電動車いすになりますと、重量としては80キロから100キロになります。

すね。座面が上がったり下がったり、背もたれの角度が自由になったり、最近の車いすはとても機能性が上がっています。

車いすは、決して移動のときだけ使うものではありません。生活にすごく密着したものです。例えば、ここで、車いすで休憩をするとか、それから、前のところにテーブルをつけてそこで食事をする、それから学習をするといういすにもなります。

信頼関係が大切

○加藤 2人ずつに分かれていただいて、車いすの実習を行いたいと思います。前の方と後ろの方とペアになって、簡単に自己紹介していただけますでしょうか。

○城戸 これから車いすに乗って、押ししてもらいます。今は言葉でやり取りができます。それが、言葉でやり取りできない部分が出たときに、どうなるでしょうか。彼のこと信頼して押ししてもらったときに、いろいろなことが起きてきます。そういうときに何を感じ取ったらお互いに信頼関係ができるのでしょうか。体験してみてください。

【二人一組になりキャンパスの中を車いす実習】

○参加者 車いすについて何も知りませんでした。相手のことをちゃんと考えて、自分の感覚だけではなくて、聞いたりして、相手の感じていること、感覚なども考えて丁寧にやらなきゃいけないということをすごく感じました。

○加藤 ありがとうございます。今の実習を通して、皆さんそれぞれいろいろなことをお思いになったのかなと思います。後半



感覚のずれを体験

のほうでは、肢体不自由というのはどんなことかなということを実際に実習を通してより深く理解していただけたらなと思います。

目に見えない特性

○城戸 今、車いす体験をやっていたいただいたことの意味を、もう少し詳しくお話ししたいと思います。突然ですが、二足歩行の私たちが一番避けなければいけないことって何だと思いますか。転ばないことです。転ばないよう、体のいろいろなことが自動的に動いています。肢体不自由の人も全く同じです。それが崩されるということがものすごく大変なことなのです。

【肢体不自由の状態を体験】

○城戸 参加者の方、一人、前に出てきてください。二足歩行の私たち、全部、重心、勝手に動いて転ばないようになっています。では押しますよ。このぐらい押されても、平気ですね。けれども、この重心移動がスムーズに動かないのが肢体不自由です。ちょっと体験してください。首の上あたりに、両手をあててみて下さい。同じように押してみます。

○参加者 (よろめく。) 本当ですか。

○城戸　すごく強く押していると思っているでしょう。重心が高いと、バランスが崩れやすくなります。肢体不自由の子の多くは、これと同じ状況です。さらに、腰を動かしたりするエクササイズに用いるバランスクッションに、普通の人がこれに座っているのと同じような状況だと思ってください。

○城戸　バランスクッションにのって、重心が上、また足の裏の感覚が非常に弱いので、足を上げてください。

○参加者　ああ、怖い。

○城戸　これです。これが肢体不自由のいわゆる座っている状況と同じ。この状態で車いすを押されていると感じてみて下さい。

○城戸　では、介助してみます。こっちに回ります。前に行きます。どうでしょうか。右左、さらに段差があったらとんでもないことだと思いませんか。

○参加者　転げ落ちますね。

○城戸　多くの子がベルト付けていますけれども、それはこれのためです。かなり恐ろしいこと。だから、信頼関係がなければだめだということで、意思疎通をしてくださいということをお願いしています。

【車いすで街に出た様子を模擬体験実習】

○城戸　男性3人、前に出てきてください。それで、私たちは車いすに座っている彼女に向かって、視線は向けなくて、ただずるずる行って囲みます。どんな感じですか。

○参加者　怖いです。

○城戸　これって怖いよね。

○参加者　はい。

○城戸　例えば、渋谷とか池袋ってこんな間隔じゃないですか。それで車いすに乗っている人がいると、人は見ます。では、ちょ

っと視線を合わせながら前に行ってみましょう。もっと嫌な感じがありますか。

○参加者　はい。

○城戸　こういう状況で車いすの人は基本的にいると思ったら理解しやすいと思います。それは、視線が低いからだけではないのです。杖の人もみんな普通に歩いている人が怖いと、思っているでしょう。すごく圧迫感を受けていると感じていると思ったらいいです。さらにもうちょっと、実際には動いているわけですね。男性の方はこっちに来てください。もうちょっと後ろに下がって。これで私たち男性はよけません。このままです。彼女はまっすぐ来てよけてください。はい、スタートしましょう。

○参加者　すみません。

○城戸　どんな感じがしますか。

○参加者　いや、何か、よけようがなかったのが怖いなと思いました。

○城戸　そうです。圧迫感がある上に、よけようがない。私たちってこうやって微妙に避けながら雑踏を歩きますよね。でも、車いすのことってみんな知らないの、基本的によけないんですよ。

○城戸　基本的には常に圧迫感を受けて、さらに急がされているという感じを受けながら生活しているのです。

車いすでのキャンパスライフ

○木下　経済学部会計ファイナンス学科1年の木下聡美です。私は、生まれつき肢体不自由のしょうがいを持っていて、車いすは4歳くらいから乗っています。なので、正直、皆さんと一緒に今日回っていて、普通の介助マニュアルにはないような、逸脱したようなことをちょっとやってしまっていま

す。肢体不自由といっても1人ひとり様々で、車いすユーザーにもいろいろいるのだなと思っていただくのがよいと思います。

学校生活や日常生活でよかったこと、困ったことという点でお話し致します。まず、私は他大学にもいろいろ見学に行ったのですが、立教大学は本当にバリアフリーだと思います。新座キャンパスは今日が初めてだったので、新座キャンパスを身近に感じていらっしゃる方に沿ったことが言えないかもしれませんが、池袋キャンパス、新座キャンパス、恐らくほとんどバリアフリーです。例えばエレベーターがあったり、スロープがあたり、キャンパスの移動がほとんどフラットだったりします。他大学だと結構坂があるところもあるので、そういった点は本当にバリアフリーな環境だと思います。

困っていることのうちの1つは、今は、ありがたいと感じているのですが、雨の日に、車いすをこいでいると傘が差せないことです。1人のときはかっぱで対応するのですけれども、濡れてしまうし正直しんどいです。皆さんご存じだと思うのですが、立教大学にはしょうがい学生支援室があって、そのスタッフの学生の方に、雨の日の移動サポートをお願いしています。雨の日に、雨が降ったのでお願いします、と連絡をとって、傘を差してもらい、自分でこぐという形をとらせていただいています。雨を回避でき、幾分、楽なのでありがたいことだと感じています。



はじめてのキャンパスライフ

他にも幾つか日常生活、学校生活の中で困っていることを挙げさせていただくと、エレベーターに乗れないことが多々あります。お年寄りだったり、ベビーカーだったり、車いすだったりを優先で、というように書いてあるところはありませんが、どうしてもそれが、なかなかできていません。もちろん、優先していただけたところもあるのですが、例えば学校などだと、エレベーターが1基しかなく、それでいて狭いところもありますよね。そういったところだと、何本も見送るということが日常茶飯事なので、その点はとても困っているところです。立教だと2アップ3ダウンと書いてあるので、できればそのあたりを少し気にかけていただけるとありがたいです。

先ほどのお話にあったように、車いすだと視線が低く、特に私は低いということもあって、人が迫ってくると圧迫感があったり、満員電車で圧迫感があったり、そういった面があります。また例えば、通行のときの歩きスマホは、多分、皆さん携帯を見ながら歩いていると、どうしても視線が上ですよ。だから、下にいる私たちのことってなかなか気づかないと思うのです。そうすると、

普通に歩いていても、おっと、となると思うのですけれども、それ以上に危険に感じてしまいます。私は、歩きスマホの方がいらっしゃるなと思ってよけようとするのですけれども、相手もギリギリで気づいてよけてくださることもあって、ただ、同じ方向によけてしまって結局ぶつかるっていうことが多々あります。

最後にもう1つ言わせていただくと、運転される方ってどのぐらいいらっしゃいますか。ちょっと手を挙げていただけますか。横断歩道がないところで渡ろうとしたときに、基本的には歩行者優先なので渡ると思うのですが、私は車が来て、その車が止まってくださったら渡るようにしています。なぜなら、運転手さんが車いす側に行っているよ、あるいは、先に行くよ、など何かしらの合図を仮にしてくださっていたとしても、私たちは見えないからです。本当に私も毎日通学していて何度もヒヤッとするところがあるのですが、私が行っていいのか、向こうが来るのかというのが全くわからないのです。ただ手だけでどうぞ、みたいにやっただけではわからないということを少し気にかけていただけたらと思います。

○城戸 たぶん車いすのことを意識したことってあまりないですね。実際はこのごろたくさん走っているけれども、でも、意識されていないのですよね。

○加藤 お互いに伝え合うというか、相互コミュニケーションがやっぱり大事なんだなということを、木下さんのお話の中から感じました。歩きスマホって、やっぱり視線がスマホに集中してしまうので、そういうことにも気をつけていきたいです。車いす

の方のお話の中で、このエレベーターの問題は、この数年間、立教でありますね。皆さん、自分が次の講義に遅れてはいけないということもあって、なかなかエレベーターを譲れないのです。「優先」という意味がなかなか。それはやっぱり、それがどう活かされるかというのは、一番最初にお話ししたホスピタリティーが大切です。相手に対する主体的な思いやりをどう持てるかというあたりにかかってくるのかなと思います。